

【安井】患者さんの許可があって、カルテ共有化の仕組みが整えば、電子カルテを導入した意義もあると私自身は考えていますが、他の先生がどのようにお考えかまではわかりかねます。とはいえ最近では、心電図を搭載された救急車からデータが転送されてくることも増えています。その際、ファックスでの転送では読み取りにくいのが現状です。インターネットを活用して情報を共有した方が良いという意見を耳にしています。

【市田】北丹エリアでは、医師が足りず、患者さんが難民になるといった状況は起きていません。

【安井】北丹エリアでは、高齢になると施設に入られる方が多く、在宅には比較的若く、自己判断で病院に行ける方が多いので、在宅医療の医師が不足するような状況にはなっ

ていないように思います。

【市田】数々の貴重なお話をありがとうございました。



令和8年度 研修会予定のご案内



京都 在宅医療

検索

※今後の研修会開催予定一覧です。演題名等詳細は順次、京都医報、当センターホームページでご案内いたします。

■ 総合診療力向上講座(Web 研修会) ■ 対象：医師

回	日程	講師・テーマ	申込
第2回	8月1日(土) 15:00~16:30	京都府立医科大学 大学院医学研究科皮膚科学 教授 福本 毅氏 テーマ 「外来で役立つ炎症性皮膚疾患の診療アップデート～病態理解から治療戦略まで～」	

オンデマンド配信一覧

■ オンデマンド配信

※動画は申込締切の23:53まで視聴できます

研修会名・対象等	配信期間	講師・テーマ	申込
令和6年度 在宅医療塾 ZERO 【対象：医師・多職種】	次回診療報酬 改定まで	角水医院 院長 角水 正道氏 テーマ 「ゼロからの在宅保険請求 訪問看護師・ケアマネジャーとの連携」	
令和7年度 総合診療力 向上講座 【対象：医師】	令和8年 9月1日(火) 正午申込締切	京都大学医学研究科 医学専攻内科学講座 腫瘍内科学 准教授 松原 淳一氏 テーマ 「進化して深化する最新がん薬物療法」	
令和8年度 京都 在宅医療塾 探究編 【対象：医師・多職種】	令和9年 1月15日(金) 正午申込締切	京都府医師会 理事／ 一般財団法人 療道協会 西山病院 院長 西村 幸秀氏 テーマ 「在宅医療におけるストレスケアの重要性 ～訪問する医師・看護師・多職種の皆さま、 疲弊していませんか～」	

在宅医療に関する質問があればお問い合わせください。サポートセンターと保険医療課で連携し回答いたします。

お問い合わせ、ご意見及びご感想は

京都府医師会在宅医療・地域包括ケアサポートセンター

〒604-8585 京都府京都市中京区西ノ京東桐尾町6番地 京都府医師会館3階
tel.075-354-6079 fax.075-354-6097

京都府医師会

在宅医療・地域包括ケア サポートセンター news

Vol. 59

2026年7月15日

京都府医師会在宅医療・地域包括ケアサポートセンター
〒604-8585 京都府京都市中京区西ノ京東桐尾町6番地 京都府医師会館3階 tel.075-354-6079 fax.075-354-6097

※当センターホームページにてバックナンバーがお読みいただけます。

Main menu

- ◆ Talk Session 「丹後・中丹医療圏の地域における在宅医療の現状と課題」について (P1~4)
- ◆ 令和8年度 研修会予定のご案内 (P4) ◆ オンデマンド配信一覧 (P4)

Talk
Session

「丹後・中丹医療圏の地域における在宅医療の 現状と課題」について

今回の在宅医療・地域包括ケアサポートセンターニュースでは、5月12日に開催した「地域医療対策委員会」において実施した、「丹後・中丹医療圏の地域における在宅医療の現状と課題」の座談会の内容を掲載いたします。



(話し手) 綾部医師会
与謝医師会
北丹医師会

大槻 匠氏
日置 潤也氏
安井 俊雄氏

(聞き手) 地域医療対策委員会 委員長
京都府医師会 理事
京都府医師会 理事

的場 聖明氏
加藤 則人氏
市田 哲郎氏

行政と協力し、継承を促進する方策を検討

【市田】まず大槻先生、綾部市の現状をお話しいただけますでしょうか。

きたいと考えています。

【大槻】綾部市では、令和に入り、すでに3軒が閉院し、現在診療所数は13軒になっています。それに伴って訪問診療を担う開業医も減少し、一部は病院の先生にも手伝っていたのが現状です。綾部市の人口は現在3万人弱、2040年には2万4000人に減少すると予測されています。高齢者に限って言えば、2040年には現在の1万1500人から9800人に、わずかながら減少すると見込まれており、総合的に勘案すると、医療や介護の需要は、2040年には現在よりやや減少しているのではないかと予想しています。

次に、当エリアでどのような動きがあるかという点ですが、2025年4月、綾部市にある3つの病院のうちの1つ綾部市立病院が病床数を減らし、小回りが利く体制に変更しました。診療所数も今後減っていく可能性があり、憂慮しているところです。こうした状況から、診療所数を維持するため、現在綾部市と協議しながら、医院を継承していただくお手伝いができないか、検討しているところです。今後綾部医師会と行政で、さまざまな方策を考え、なんとか踏ん張ってい

【市田】継承のお手伝いを検討されているとのことですが、具体的にはどのような取り組みをされるのでしょうか。

【大槻】まだ正式に決まっていますが、クリニックの建物を維持するため、資金面でのバックアップなどを考えていると聞いています。継承はご家族の問題でもあるので、医師会が立ち入りづらいところではありますが、綾部市の事業では、各開業医の先生のところに伺って、ご子息がお戻りいただけるかなど、本音を聞いているところです。その結果を今後の施策に盛り込んでいく予定です。

【市田】資金面だけでなく、一歩踏み込んだ支援をお考えということですね。



綾部医師会
大槻 匠氏

【**的場**】私は、大学で遠隔診療に関する講座の特任教授を務めており、以前、綾部市奥上林地区を見学で訪れたことがあります。その際、コミュニティナースや保健師さんが、がんばっておられるようにお見受けしましたが、そうした方々と開業医の先生方とのつながりはありますか。

【**大槻**】コミュニティナースの制度の存在は、承知していますが、現状では、直接接点がないのが現状です。

【**的場**】現地で「iPad を使った遠隔診療はいかがですか」と尋ねても、「無理、無理」という反応で、現在は3つの診療所に高精度の血圧計を置くところから始めています。もし間に入って調整してくださる方がいたら、遠隔での病気の早期発見や治療も可能になるかもしれませんね。今後綾部市の方にも相談させていただきたいと思います。

【**加藤**】綾部市立病院で診療していると、小児の救急を非常に多く見ます。綾部市で開業されている小児科の先生は、あまりおられないのでしょうか。

【**大槻**】小児科がないわけではありませんが非常に弱く、開業医だけで小児を診るのは、難しくなりつつあると認識しています。

与謝医師会一丸となって在宅医療を支えている

【**市田**】続いて与謝医師会の日置先生、お願いします。

【**日置**】昨年、与謝医師会では、在宅医療への取り組み状況について、会員の方々にアンケートを実施しました。28診療所から回答をいただき、このうち在宅医療に関わっているのは15診療所で、4分の3は在宅医療に関わっていることがわかりました。割合としては多いですが、逆に言えば、このような僻地でも、在宅医療に関わっていない医療機関が4分の1もあるという見方もできると思います。もちろん年齢的・体力的な問題で、できないといった医療機関もあるとは思いますが、今後少しでも多くの医療機関に在宅医療に関わってもらえるような働きかけが必要だろうと考えています。

次いで、現在の訪問診療の総数は557件、5年後にどのくらい訪問診療を行えるかという質問に対しては最大633件と、私たちの予想に反して増えていました。最近、比較的若い先生が2人新規開業され、その方々の意気込みが、結果として表れているのではないかと推測しています。

アンケート以外の自由記載欄には、「訪問診療、とりわけ看取りについて、休日や夜間の時間を確保することが負担になっている」といった意見



与謝医師会
日置 潤也 氏

【**加藤**】子どもの人口が減少する中で、小児医療を維持するのは大変だろうと思います。綾部市のような中丹エリアでも、そうした現状があるということですね。

【**的場**】大学からの医師派遣や総合診療科の必要性の観点から伺いたいのですが、現在、どの程度の間隔で処方を行っていますか。

【**大槻**】当院では1ヵ月を目安に処方しています。先生によって判断は異なると思いますが、私自身は、高齢の方はいつ容体が急変するかかわからないので、こまめに診たいと考えています。

【**的場**】高齢になると車を手放したりして、1ヵ月に1度受診するのが難しい方もいると思いますが、その辺りはいかがですか。

【**大槻**】現状ではご家族が送迎されるケースが多いようです。また「あやバス」というコミュニティバスの全路線が綾部市立病院に乗り入れており、バスに乗っていただければ、病院に行けるようになっています。

がありました。与謝医師会では、北部医療センターの「看取りサポートシステム」を活用しており、開業医が不在の際に、北部医療センターに死亡確認をしていただく仕組みがありますが、その際に、「死亡診断書や検案書まで作成してほしい」といった意見も寄せられました。

総括すると、当医師会の在宅医療の担い手は、60歳代がボリュームゾーンで、この年代が地域医療を支えているといえます。70歳代の先生方も多く活躍されており、今後数年から10年スパンで見ると、やはり世代交代や継承が、地域の大きなテーマになってくると推測されます。在宅医療においても、今後は若手や中堅層の先生方との円滑なタスクシェアや、ICT を活用した効率化が重要になると考えています。

一方で訪問診療の受け入れ可能人数については、予想に反して、5年後も変わらないか、微増する見込みだとわかりました。ただし個別の意見の中には、「高齢化のために訪問診療を減らす」という回答もありましたし、また一部の診療所が多くは訪問診療を引き受け、総数をカバーしている実態もあるので、今後は、受け入れ先が減少しても対応できるように与謝医師会としても検討し、柔軟性を維持していくことが重要だと考えています。さらに5年後をめどに再調査を実施して将来の傾向を改めて予測し、対応していくつもりです。

病院と連携した看取りに「カルテ共有システム」活用の可能性は？

【**的場**】北部医療センターの「看取りサポートシステム」が役立っている一方で、死亡診断書を書くところまではサポートできていないとのことですが、例えば北部医療センターと開業医の先生が「カルテ共有システム」でカルテを共有できたら、看取りに行きやすくなる、あるいは診断書を書きやすくなるといったメリットはあるでしょうか。

【**日置**】死亡診断書・検案書については、ご家族のご意向も考慮しなければならず、簡単には代行をお願いできないと考えていますが、カルテの共有については与謝医師会の中でも積極的に進めようという意見が出ています。「日本海ヘルスケアネット」のようなシステムを構築できたらいいと思っています。

【**的場**】与謝エリアで開業されている先生方は皆、与謝医師会に所属されていますか。入会されていない先生もおられるのでしょうか。

【**日置**】開業医の先生全員に与謝医師会に入会していただいています。

【**的場**】その意味では、開業医の先生同士、円滑に意思疎通できているということですね。

【**加藤**】宮津市に休日応急診療所がありますが、こちらは各診療所の先生方が順番に診療を担当されているのですか。

将来にわたる「かかりつけ医機能」の維持が課題

【**市田**】続いて北丹エリアの現状について安井先生、お話しください。

【**安井**】北丹エリアは、京都府下で3番目の面積を持つ広い地域です。医療圏の端は、公的機関や診療所でなんとかカバーされているのが現状で、丹後町の端から病院まで救急車で運ぶと、50分近くかかるところもあります。実際、開業医も町なかに集中しています。数えたところ、当エリアにある8つの内科の開業医すべてが、旧市町村の中心部に診療所を構えていました。開業医の年齢も、先ほどの与謝医師会と同じく、60歳代が多くを占めています。若者がどんどん流出し、「若手の医療の担い手が少ない」と、どの病院の先生からもお聞きするので、今後、高齢化を理由に開業が減少すると、在宅医療を含めた診療体制に問題が生じる可能性があるかと危惧しています。

当エリアの最近の動きとしては、一つには定期的に病診連携会議が行われており、私も副会長として出席しています。会議には北部医療センターの病院長、京丹後市や保健所の方も出席され、各医療機関での取り組みについて情報を共有しています。今後の地域医療連携の予定も、いずれ組み込まれていくのではないかと考えています。

その他、看護や訪問看護についての勉強会も開催されています。昼間の開催のため、お忙しい開業医の先生方の参加

【**日置**】その通りです。休日応急診療所は宮津市、与謝野町、伊根町が共同で運営する施設ですが、主に内科系の休日診療を行っており、20名ほどの先生が輪番で診療を受け持っておられます。外科系の先生方は在宅当番医として自院で休日診療を行っておられ、その輪番には北部医療センターにも加わっていただいています。

【**市田**】与謝医師会の訪問診療の現状について、日置先生は「4分の1がやっていない」とおっしゃいましたが、都市部に置き換えると、「4分の3」は、驚くべき参加率です。訪問診療件数も、多い方で月50件、少ない方でも月10件とのこと、京都府医師会のアンケートで得た平均月5件と比べても、非常に多いといえます。与謝医師会の先生方が一丸となって訪問診療に取り組んでくださっている結果です。ぜひ外部にも積極的に発信していただければと思います。



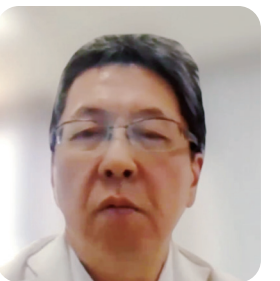
は少なかったのですが、今後そうした場を通じて、訪問看護との連携が深まっていけばと思っています。

一方、ITネットワークの活用に関しては、北丹医師会ではメールでのやりとりに限定しているのが現状です。

今後、北丹医師会としては、病診在宅介護連携を中心に、コミュニティへの周知を図っていくつもりです。それが在宅医療の強化にもつながっていくと考えています。

将来はかかりつけ医機能を維持するのが難しくなっていくことが予測されます。介護審査や学校医、警察医をされている先生も多く、それらに欠員がでることも考えられます。医療や介護など、どの部分に過不足が出てくるかを把握した上で、しっかり調整していく必要があると考えています。

【**的場**】北丹医師会のエリアには、京丹後市立久美浜病院や丹後ふるさと病院といった大きな病院がありますが、その中に「カルテ共有システム」や「日本海ヘルスケアネット」のような仕組みがあると、役に立つとお考えですか。



北丹医師会
安井 俊雄 氏